

誘惑コンプレックス

目次

誘惑コンプレックス

5

書き下ろし番外編

誘惑ハースデイ

341

誘惑コンプレックス

プロローグ ありえない失態

それはある金曜日のこと——呑んだことのない種類のお酒で深酔いし寝てしまった私は、とんでもない夢を見ていた。

誰にも見せたことのなかった生まれたままの姿を、男の人の前に晒さらしているのだ。

「あ……っ……んんっ……」

ゴツゴツした大きな手に直じかに胸を揉もみしだかれ、自分のものとは思えないほどのいやらしい声をこぼす。

指が食い込むたびに、胸が見たことのないような形に変わっていく。

「こんな胸をしていたのか。想像よりもずっと可愛くて、綺麗だ」

「あっ……しや、社長……」

その男の人は、なんとうちの会社の社長である君島晃きみじまあきらさん。

そう、私は社長とホテルでエッチするという、ありえない夢を見ていた。

胸の感触を楽しんでいた社長は、胸を持ち上げるように根元から掴つかみ、強調された先

端をチロリと舐なめた。

「ひゃうっ……!」

それから舌先で乳輪をくるくるなぞられると、先端がブクリと起たち上がる。次いでまた硬くなった先端を舐められ、身体が大きく跳ね上がった。

「や……っ……ん」

社長は見せつけるように舌を動かして、胸の先端をちろちろと舐め続ける。くすぐったくて、でも気持ちよくて……触れられてもないお腹の奥が熱く疼うずいてしまふ。

短く整えられたサラサラの黒髪、凛々りりしい眉、指紋一つついてないピカピカの眼鏡の奥には切れ長の目、シュッと通った高い鼻、形のいい唇——思わず見惚みとれてしまうほど綺麗な顔立ちだ。そんな彼に胸や足の間にある恥ずかしい場所を舐められると、羞恥心しゆうちしんが燃え上がる。

「これは嫌か？」

「い、嫌……じゃないです。でも……んっ……く、くすぐったくて……あんっ……」

ああ、なんて夢見ちゃってるの……!

こんなの失礼すぎる! 早く目覚めなきゃ!

……とは思わなかった。それどころか気持ちよすぎて、目覚めたくない! なんて

思っていた。

「あっ……んんっ……しゃ、社長……っ……んんっ……あっ……あん……！」
初めて味わう快感に、とろけてしまいそうだった。

「……っ……い、痛……っ」

そして身体の中に初めて男性を受け入れる痛み……下半身が引き裂かれてしまうんじゃないかと思うぐらいの痛みだ。

——それは、ひどくリアルな感覚だったのに、私は夢だと疑わなかった。
だって社長とこんなことになるなんて、夢でしかありえないから……

けれど翌目を覚ました私は、青空もビクッするほどに真っ青になっていた。

「嘘……」

嘘でしょ!? 誰か、嘘って言って!

なぜなら私が寝ていたのはホテルのベッドで、隣に社長が眠っていたからだ。

仮面一 仮面が壊れた日

私は仮面を被^{かぶ}って生きている。

今までも、そしてこれからも——この仮面を外すことは永遠にない。
ないっしたら、ないっ! ……うん、ないっ!

『あーあ、可愛くなりたいな。杉村さんくらい可愛かったら、人生変わるんだろうな
あー』

その台詞を私は今まで何度聞いただろう。

私、杉村莉々花は今から二十六年前に、ごく普通の家庭の一人娘として生まれた。特
に秀でた才能や特技もないし、成績や運動神経はよくも悪くもない。平均的な普通の人
間だ。

ただ普通じゃなかったのは、容姿である……。自分で言うなって突っ込まれてしま
うかもしれないけれど。

生まれてくる際になぜか遺伝子が張り切ってしまったらしくて、両親やご先祖様から

選りすぐりのパーツを集め、絶妙に配置した結果——誰もが羨むような容姿になったのだ。

目はぱっちり二重だし、まつげエクステをしているとよく間違われるので、まつ毛も多いらしい。鼻は高すぎず、低すぎず、整った形だと両親は言っていた。どうやら母方の祖母似のようだ。唇はふくらましていて少し厚め。辛いものを食べすぎて腫れた唇みたくで自分ではあまり好きじゃないけれど、人からは芸能人の誰々さんみたいな唇だね、と言われる。これは父親似の唇だ。父はもつと薄い唇がよかったと、私と同様に自分の唇を好いてはいないらしい。

肌の色は白いほうだ。父方の遺伝で長時間日に当たっても、赤くなって痛くなるだけで少しも黒くならない。肩まで伸びた髪は、よく染めていると誤解される薄茶色。しかも、パーマに間違われるような癖がある。

身長は百六十センチ、母の太りにくい体質が遺伝したようで、私もいくら暴飲暴食をしても太らない、というよりも、太る前に胃を壊すので四十五キロ前後をキープしている。

ここまで言うとう意識過剰のとてもないナルシストに聞こえるかもしれないけれど、誰もが知っている有名なところから、聞いたことのないところまで、様々な芸能事務所からスカウトされたことがある……と言えば、証拠になるだろうか。

今まで出会った人の多くは、私が自分の容姿にさぞ満足していると思っていろいろ、実際にそう言われてきたので思っているはずだ。

だけど力強く言いたい。誤解です！謙遜でもなんでもなくて、本当に誤解なのだ。私はむしろ自分の容姿が大嫌いで、できることなら中身と同じく平々凡々に生まれてきたかったと心から思っている。

なぜならこの容姿のせいで、物心付いた頃から悲惨な目にしかあつたことがないからだ。

まず初めにある記憶は、母が父方の親戚から嫌味を言われているところだ。

あまりに整いすぎて、父と顔立ちが似ていない。父の子じゃないのでは？と、父がないところでしたしく尋ねられ、うんざりしていた。

パーツの一つ一つを見ていけば父方、母方、両方に似ていることがわかる。だけど、ただ母をいびることでストレス解消がしたかったのか、親戚で集まるたびそんな嫌味を言われていたのを知っている。

親戚間で波風を立てたくないと思った母は、自分だけ我慢していれば事を荒立てずに済むからと、そのことを父に黙っていた。だけど、実は近くでそれを聞いていた私が不安になって、『私はお父さんの子供じゃないの？』と大泣きしながら父に直接聞いたことでバレてしまったのだ。

ブチ切れた父は、『俺の娘に決まってるだろうが！ 信じられないなら証明でもなんでもしてやる！』と、DNA鑑定までして親戚を黙らせたのだった。

父と母はその一件を乗り越えたおかげで、元々よかった夫婦仲をさらによくしたようだった。けれど私は、親戚に言われた醜い言葉が耳にこびりついて、なんとなく自分の顔を鏡で見るのが嫌になり始めた。

しかもDNA鑑定の費用で家計が圧迫されたせいで、しばらくの間おかずはとても質素なものになった。

次に記憶しているのは、小学校に上がったばかりの頃だろうか。今思うとゾツとする出来事があった。友達と遊んでいて、ほんの少しだけ一人になるタイミングがあった時、それを見計らったように中年の男性にいきなり担ぎ上げられて、連れ去られそうになったのだ。

幼すぎてその意味をわかっていなかった私は恐怖を感じるよりも驚いて、『おじさん、誰！』と、大きな声で騒いだ。運よく近くに大人たちがいたので、気付いてもらえた。

大人たちが慌てて駆けつけると男性は私を乱暴に下ろし、そのままどこかへ逃走したらしい。警察にも通報したけれど、未だに犯人は捕まっていない。

そのこともあり、私は両親の付き添いナシでは遊びに行くことを禁止され、小学校の登下校も両親のどちらかの車に乗ってすることになった。

大人になった今は、働きながら毎日私の登下校の送迎をするなんて大変だっただろうな、本当に有難い……と好意的に考えられるけれど、当時の私はそれが嫌でたまらなかった。みんなは友達同士で帰っているのに、自分だけが両親の車で帰るなんて寂しかったし、お前だけ車で通学なんて狭い（せま）と毎日言われて辛かった。

それから小学三年生の夏、私には初めて好きな人ができた。

『そのペンケース可愛いね』

『ありがとう！ お気に入りなんだ』

『どこで買ったの？ 妹が好きそうだから、今度の誕生日に同じの買ってあげたいんだけど……』

『えっとね……』

席替えて隣になった男子、大木くんと自然と仲よくなり、気が付くと好意を持つようになつていた。けれどその男子は、クラスのリーダー的な存在である女子、奈々子ちゃん（ななこちゃん）の意中の人だったらしくて、彼と話すたびに文句を言われるようになった。

『ちよっと莉々花ちゃん、大木くんと話さないでよ』

初めはこの程度だった。

『どうしてそんなこと言うの？』

『とにかく話さないでったら、話さないでっ！ 少しぐらい可愛いからっていい気にな

らないでよねっ！ わかった!? 奈々子の言うことは絶対なんだからっ！」
話さないでと言われても隣の席だし、授業で会話が必要な時もある。それに好きな人とはキツカケを見つけて、たくさん話したいものだ。

顔のことでいい気になったことなんて一度もない。それにどうして奈々子ちゃんに言われた通りにしなければいけないのだろうという反抗心もあり、私は彼女の文句を気にしないようにして、普通のクラスメイトと同様に大木さんと会話し続けていたのだけ
ど……

自分の言う通りにしなかったことに腹を立てた奈々子ちゃんは、クラス中の女子たちにあらぬ噂を流し始めた。

『莉々花ちゃんがね、みいちゃんのことすっごいブスって言ってたよ』

『えー、なにそれ……』

『酷いよね。ちよっと可愛いからっていい気になってさ……』

言ってもいない悪口を言ったことにされて、私はあつという間にクラスで孤立してしまつた。どんなに弁明しても信じてもらえなくて、親しかつた友達や大木くんも嫌われ者の私を避けるようになった。

しかも奈々子ちゃんとは中学三年生まで同じクラスだったため、中学校でも暗黒の三年間を送るはめに……

奈々子ちゃんの流す噂は年齢を重ねるたびにグレードアップしていった。最初は『みいちゃんのこと、すっごいブスだって言ってたよ』なんて可愛いレベルだったのに、中学校三年生の時には『莉々花ちゃんってすっごい男好きで、彼氏をとつかえひつかえしてるらしいよ。性病にもかかったことあるんだって!』やら『莉々花ちゃんって、整形してるらしいよ。整形代を稼ぐために身体売ってるらしいよ』などといったところもなくハイレベルなものに変わっていった。

私の持ち物を見て『そういう可愛い持つのは、男受け狙ってるからでしょ? モテるために必死っつ!』などと通りがかりに小さな声で言われる日々。ある時は体育の時間に着替えていると『莉々花ちゃんの下着ってなんかエロくない? 帰りに男と会うかなんでしょ?』と大きな声で言われて、その場にいた女子全員にジロジロ見られたこともあった……

奈々子ちゃんは目立つグループにいたから、そのグループからはもちろん嫌われ、噂を信じた大人しいグループの女子からも嫌われた……というより、不良扱いされて恐れられていた。

奈々子ちゃんが流した、くだらない噂を信じた男子数名から陰で『いくら出せばやらせてくれるの?』と尋ねられたこともある。ちなみにその中に、当時私が密かに憧れていた先輩もいて、もちろん光の速さで幻滅した。

中学生になってからは、もう小さな子供じゃないんだから大丈夫だと両親の送迎を断って一人で登下校していた。だけど、いきなり知らない男性から『可愛いね』と話しかけられて、それ以降つけ回されるようになってしまい、また車での送迎に逆戻りした。こうして自分の顔がどんどん嫌になって、とうとう大嫌いになった。

太れば少しは見た目が変わるかも!? と思い立ち、一時期は逆ダイエットに励んだこともある。

夜中に高カロリーなものを食べれば太る、食べた後にすぐ寝ると太る、などと聞いたことがあるので、目覚ましをかけて深夜に起きて、お菓子や夕方こっそり買っておいたコンビニ弁当をガツガツ食べてすぐ寝る生活を三日ほど続けたところで胃を壊した。それで一週間も学校を休むはめになったのだった。

どうしてこうも不運なのだろう。母のお腹の中で、この顔立ちや体質を形成した時、胎児にして一生分の幸運を使い果たしたに違いない。

一人に与えられた幸運が百あるとして、みんなは長い人生でその幸運を万遍なく使っていくところを、私はいっぺんに……という仮説まで立ててしまふ。いや、もしそうだったとしても、考えたってどうにもならない。

今後の人生をどう快適に生きていくか、考えなければ……

小中学校の同級生から離れたくて、私は知っている人が一人もないであろう遠くの

高校への進学を決めた。自分の学力よりも少し上の学校だったから死に物狂いで勉強し、見事合格。

暗黒の学生時代はもう終わり！ 高校生になったら友達を作って、高校ライフを充実させるんだ！……とはいえ、この顔のせいでまた嫌なことが起きるかもしれない。

やだなー、怖いなー……って怯えてるだけじゃなくて、予防策を取らなければ！

中学を卒業してからの春休み期間は、なにかいい方法はないかとそればかり考えていた。でも全然思い浮かばない。少しか気分転換しようとしてテレビを付けると、可愛く笑う美少女が映っていた。彼女の名前は目下部シユリちゃん。歌手、モデル、役者、様々な分野で活躍していて、歳は私と大して変わらないと記憶している。

こんなに綺麗で可愛かったら、さぞかし大変な人生を送ってるんだろうなあ……

なんとなく興味が湧いて、パソコンでその子の名前を検索した。多少彼女をけなすような意見も出てきたけれど、それ以上に出てくる、出てくる！ 絶賛の嵐！ しかも男性じゃなくて、女性からの称賛の声が圧倒的に多い。

こ、これは何事……!?

衝撃を受けた私は、シユリちゃんについて徹底的に調べることにした。

『可愛いのに、気さくでサバサバしてるよね。気取ったところがなくて親しみやすい。友達になりたい！』

『ちょっとおっさんっぽいよね。間食はいつもスルメ食べてるんだって（笑）。あんな可愛いのに、すっごいギャップ！ でもそこがいい！』

『シユリちゃんが私の好きなアイドルと共演していても、全然嫉妬（しつと）しない！ 異性に媚（こ）びる感じがまったくないし、スキヤンダルとは無縁（むぎん）そう。可愛いのに彼氏（カノコ）もいらならしいよ』

『ドラマとかの衣装は可愛い系が多いけど、プライベートの服はシンプルで好感が持てる』

まとめると女っぽさを感じない、ちょっぴりオヤジな性格で、持ち物や服装や好む食べ物、可愛いものよりもシンプルで女を感じさせないもの！ 異性に媚（こ）びない！ 彼氏（カノコ）なんて興味がないという女の子が同性から好感を持たれるようだ。

もしやこの子を見習えば、私も女子から好（す）いてもらえる!? というか、奈々子ちゃんの悪い意味での功績も大きかったけれど、今までの私の態度は彼女の噂（うわさ）を助長するぐらい、女子から反感を買ってしまうものだったのかも……!?

こ、こ、これだ——……! !

あまりに名案すぎて、頭の天辺（てんぺん）に雷（らい）が落ちてきたみたいな衝撃が走った。

可愛いものが好きで、服装や身の回りのものをそういう系で揃（そろ）えているけれど、それは家だけで使うようにしよう。背に腹は代えられない。それから、男子とも関わらない

ように！ 本当は高校生になったらドラマみたいな恋をしたい……なんて思っていたものの、実際ドラマに出てくるようなステキな男性なんていない気がしてきた。

だって今まで好きになった人は、私がクラスで嫌われ者になったら無視するようになったり、根も葉もない噂（うわさ）を信じて、いくらでやらせてくれるの？ なんて聞いてきたし、その他も変質者（へんしつしや）だったり、ストーリーカードだったり……

……とにかく二兎（にと）を追う者は一兎（いっとう）をも得ずって言うし！ とりあえず恋愛は後回し！ 同性の友達を作って高校デビューして、明るく楽しいスクールライフをエンジョイするぞ！

おっと、前準備もせずに本番を迎えては、キャラがぶれちゃうかもしれない。新品のノートを用意して、偽（いつわ）りの自分の設定（せいてい）を書き込んでいく。

サバサバしていて、明るくて、元気で、人懐（ひとなつ）っこくて、男の子に媚（こ）びない！ それから、それから……

興奮しているせいか力が入りすぎて、シャープペンの芯（こ）がボッキボッキに折れるものだから、途中でボールペンに替えて書き込んだ。もしかしたら受験勉強（いけんべんぎん）よりも頑張ったかもしれない！

次に全財産を使って下着をすべてシンプルなものに買い替えた。これで体育の時に見られてもバッチリだ。中学校の時のものをそのまま使う予定だった文房具も、可愛さと

はかけ離れたデザインのものに変えた。自分で決めた設定を忘れないで演技れば完璧だ。入学式前日は一睡もできず、当日は興奮状態のままの出席となった。結果から言うところ、高校デビューは大成功だった。

偽りのキャラを前面に出したところ、入学一か月ほどで少し前までの私が見たら驚いてしまうほどたくさんの友達ができた。評判はシユリちゃんと同じで、気さくでサバサバしていて親しみやすいと上々だ。中にはこの性格でも反感を持つ人がいて、全員と仲よくなれるわけじゃないけれど、それは仕方がない。全員から反感を持たれずに仲よくなるなんて、超人でも無理だろう。

放課後の教室に残って他愛もない話をする時間、ファストフード店への寄り道、友達がいる体育祭に文化祭——毎日が楽しくて、キラキラ輝いて、一人でいる時とはまるで違つて見えた。

『莉々花つてホント面白いよね！ 私、莉々花と友達になれて嬉しいっ！ ね、今度買い物行つた時さ、おソロのストラップ買おうよ！』

『う、うんっ！ 買いたいっ！』

初めて特別親しいと思える友達もできた。偽りの仮面を被つた私を好きだと言ってくれる友達……本当の私を見たら、どう感じるだろう。

いや、見せない。だって嫌われたくないから……

『四組の高見エリつて、知ってる？ クラスで一番小っちゃくて可愛い子！ あの子さあ、すっごい男好きだよ。男が話しかける時と女子が話しかける時じゃ、全然然、態度違うのっ！』

『あー、それうちも思った！ てか男子に話しかける時だけ妙に上目遣いじゃない？ 声とかも甘つたるくてさあ』

『やあんっ！ 倉木くんのばかばかあんっ！ エリ、そんなこと思つてないもおんっ！』

『ぶっ……あはっ！ や、やばっ……似すぎなんですけどぉー！』

他愛のない話の中には、他の女子の悪口もある。ああ、過去に私もこうやって言われてたんだろうな。

自分と重なって胸がチクチク痛み、さすがにその会話には参加できなかった。やつぱり男子と話したり、親しくしたりすると、女子から嫌われてしまうようだ。

『莉々花はさあ、好きな子とかいないの？』

『うん、いないよ』

『じゃあさ、気になる人は？』

『いない、いない』

傍から見れば女子高生が恋バナをしている微笑ましい光景だろうけれど、私にしたなら尋問にかけられているような気分だ。

『じゃあさ、うちのクラスの中なら誰が好み？』

万が一答えを間違えれば、あつという間に過去の自分に逆戻りだ。

『好みとかよくわかんないし、あつ！ 漫画でなら好みのタイプのタイプは言えるよ。ツーピースのルミ！ あの大っきい胸には夢が詰まってるよねえ』

『あつはは！ おっさんくさいぞ！ しかもそれ女のキャラじゃん！ ていうか勿体ない。こんなに可愛いのにい！ あ、そういえばユーコ、最近付き合い悪くなったと思わない？ 彼氏ができてからちよつと変わったよね』

『わかる！ 彼氏優先になったよね。気持ちにはわかるけど、そういうのはちよつとね。前まではサバサバしてたのに、なんか最近はお女を意識しすぎてるっていうかあ』

昨日まで仲がよかった子も、男が絡めばすぐ敵となる。

こうなったら、徹底的に男子から遠ざからなきゃ……！ と、私はさらに男子から距離を置いた。

自分の作り出した仮面を守るのは大変だったけれど、それ以上に一人ぼっちになるのが怖かった。また事実無根の噂を流されるのが嫌だった。

だから私は、今までもこれからも仮面を被り続けるのだ。

でも心の奥で、なにかが疼き出すこともある。

これはきつと気付いてはいけないものだ。それに気付いたら最後、二度と仮面を被れ

なくなるだろう。だから気付かないふりをして心の奥底に押し込め、仮面が外れないようにしっかりと固定する。

この仮面さえあれば、大丈夫――



月日は流れ、現在――私、杉村莉々花は仮面を被り続けたまま、社会人六年目の春を迎えていた。

こっちにはこの色を……うーん、こっちのほうがいいかな？ でもこの色は印刷で出にくいんだよなあ……

「杉村、ちよつといいか？」

「あ、はい！」

デスクでパソコンと睨めっこしながら仕事と格闘していると、社長からお呼びがかかった。

「パルファムの件ですか？」

「ああ、B案のデザインで決定だ」

「B案ですね。わかりましたっ！」

やったー！ 絶対B案がいいって思ってたんだよね！

高校卒業後、私はデザイン系の専門学校に二年通い、必死の就職活動の結果、卒業後は小さなデザイン事務所——「君島デザイン事務所」へ広告デザイナーとして就職することとなった。

私が入社した六年前は中心部から外れたビルの二階にオフィスを構えていたけれど、今では大きな事務所に成長。八名だったスタッフは三十名にまで増え、都心部にあるビルのワンフロアにオフィスを構えている。

会社が大きくなるにつれ、私も社会人として成長していった。

現在は大手アパレルメーカーの株式会社パルファムが新しく立ち上げる予定のブランドのロゴデザインやポスターの制作といった大きな仕事を任されて、忙しくも充実した日々を送っている。

昔から美術の授業が好きで、他の教科に比べたら割と成績がよかった私。高校卒業後の進路をなんとなくデザイン専門学校への進学に決めた。

専門学校ではデザインの基礎を学び、授業の一環として自治体や企業が行っているコンテストに積極的に参加するように言われていた。強制ではないので一度も応募しない人もいたし、私もあまりノリ気ではなかったけれど、せっかく入学したし一度くらいは……と出したコンテストで小さな賞をもらったのだ。小中学校時代は、よく『杉村さ

んって頭も普通だし、運動もできないし、取り柄は顔だけだね』と言われていたので、本当に衝撃だった。

コンテストの審査員は、私の顔じゃなくて、私の生み出した作品を見てくれる。顔以外の私を見てくれてるんだ……！

このことがキッカケで私はデザインの世界にどっぷりとのめり込み、現在に至る。気が付いたら『いつかはするぞー！』と思っていた恋愛には目もくれず、彼氏いない歴イコール年齢を更新中なのだけ……特に焦ってはいない。

中学の時に憧れたった先輩から、いくらでやらせてくれるのと聞かれてからは、誰かに心を奪われることもなかったし……日常的に痴漢や変質者にあっていると、世の中の男なんてみんなこうなんだ！ ドラマみたいな恋なんて都市伝説みたいなものなんだ！ 変な男と恋愛するぐらいなら一人でいいや！ という気持ちになっってしまう。恋愛に対して憧れはあるものの、よーしっ！ 恋愛をしよう！ 彼氏見つけるぞーっ！ という気にはなれないのが正直なところだ。

傷付くぐらいなら、もう期待なんてしない。彼氏なんていらぬ。私はこの仕事があれば、それでいいや。

周りには恋愛経験ゼロだと知られたら奇異な目で見られるので、今まで付き合った男性が二人いる、という設定にしている。もちろん、誰かに聞かれても説明できるよう

に、付き合った期間の年表とキャラ設定を極秘ノートに詳しく記してあるのでバッチリだ。誰かに見られたら恥ずかしさのあまり死んでしまうかもしれない。だからもし不慮の事故やなんらかの理由で私が死んだ場合、このノートは中身を見ないで燃やして下さい、と表紙に書いて、ベッドの下に隠してある。

「B案を元にC案のカラーを生かしたのも見たいそうだな」

「わかりました。じゃあ、すぐに……」

「明日までにあればいい。昼休憩、しつかりとれよ。スルメや昆布こんぶは昼飯じゃなくて、つまみだからな」

社長が自分の腕時計をツンと突く仕草を見て、とつくにお昼の時間を回っていることに気付いた。

「はい、わかりましたっ！」

彼は君島晃社長、二十六歳まで大手広告代理店で営業職の経験を積み、それから独立して君島デザイン事務所を設立したすごい人だ。

入社した当時から『独立して社長になっちゃうなんてすごい！』と思っていたけれど、同じ歳になったことでさらに社長のすごさがわかるようになった。二十六歳で会社を立ち上げるなんて、しかもここまで大きい会社にできるなんて本当にすごい！

けれどすごいのはそれだけじゃなかった。サラサラでツヤツヤな清潔感のある黒髪、

凛々りりしい眉、指紋一つついてないピカピカの眼鏡の奥には切れ長の目、シュッと通った高い鼻、形のいい唇——思わず見惚みとれてしまいそうなほど綺麗な顔立ちなのだ。

顔立ちだけじゃなくて、スタイルも素晴らしい。三十歳を超えても無駄な脂肪が少しも付いていないことは、スリッ越しでもわかる。顔を見ようとすると首が痛くなるほどの身長は、噂うわさによると百八十センチ近いらしい。

クールビューティー……というのだらうか。こんなに綺麗な男の人を見るのは初めてだ。歳を重ねていくほど、その美しさが磨みがかれていくような気がする。

無駄な話はしないし、飲み会の場合でも社員との間に一線を引く姿勢を崩さない。プライベートは謎に包まれていて、付き合っている人がいるのか、結婚しているのかも不明らしい。女性社員やビルに入っている別会社の社員が何人か社長に告白し、あえなく玉砕さい——その際に恋人や配偶者の有無を質問しても『答こたえる義務はない』と一蹴いっしゅされたそうだった。

みんな冷たいって言うけど、私はとても優しい人だと思う。

口数は多くないものの、残業が続いている社員には気遣って差し入れをしてくれるし、社員がどんどん増えていっても、社員一人一人のことをよく見てくれている。さっきもそうだった。私はいつも作業に夢中になると、昼食を抜いてスルメや昆布をかじってやり過ぎそうとすることがあることを、社長はしっかり見抜いている。

周りから気を遣われないように『ダイエットしてるので』やら『今日は朝食を食べすぎてしまってお腹が空いてないので』などと適当に理由を付けても、社長にそんな言い訳は通用しないみたい。

それに四年前、初心者でもそんな間違えはしないでしよう！と突っ込みたくなるようなミスを出しかした時、先輩には散々怒られたけれど、社長は決して責めてこなかった。

そんな社長の態度に最初は、呆れられてるのかな、失望してるから怒ることさえしてくれないのかも、怒るって体力がいるもんね、と悲しい気持ちになっっていた。

『社長、どうして杉村さんを叱らないんですか？』

泣きそうになるのをなんとか堪えるためにトイレにいますと、喫煙所から当時いた女性の先輩と社長の話す声が聞こえてきた。トイレの前に喫煙所があるので、どちらで話す声も筒抜けなのだ。

『杉村さんが可愛いから叱らないんですか？ オヤジっぽいところがありますけど、顔は芸能人みたいに可愛いですもんね』

ああ、また顔のことを言われてる……

出るに出られない。そして、その時は耳をふさげばいいなんて思い付かなかった。

デザインの世界では顔のことなんて関係なく生きていけると思ったけど、そういうわ

けにはいかないか。

自分のミスが招いた結果だ。——情けなくて我慢していた涙がこぼれそうになった時、

社長は毅然として答えた。

『ああ、可愛い』

『……っ……やっぱり！』

悔しさと憎しみと落胆が混じった先輩の声、これまで何度も聞いた声だ。

先輩が社長のことを憧れや尊敬に加え、なにか特別な感情を込めて見つめているのは気付いていた。

今の様子を見るに、やっぱり先輩は社長のこと……

これでもう、先輩との関係は変わってしまう。

先輩に怒られた時、すぐへこんだけど嬉しかった。中には自分のストレスを発散させるために怒る人もいる中、先輩の説教は私が二度と同じ失敗をして困ることのないようにという思いからくるのだと伝わってきたから。

でも、そんなまっすぐにぶつかってくれることはもうないだろう。恋愛が絡むと、事情は変わってしまう。

『そうやって私情を挟むのはどうかと……』

『なにか勘違いをしていないか？』

『へ?』

見てないのに、表情が伝わってきそうなくらい呆気にとられた声が聞こえた。
『お前も杉村も俺に付いてきてくれる大切な社員だ。可愛くないわけがないだろう。俺が杉村を叱らなかつたのは、俺が叱る必要がないと感じたからだ。俺が言わなければいけないことは、すべてお前が伝えた。あいつがもう十分反省していることに、お前は気付いてるんだろう?』

『あ、当たり前ですっ!』

『だったらこれ以上俺が言っても、あいつを必要以上に落ち込ませるだけだ。そんなもの是指導でもなんでもない。単なる自己満足だ。……だからといって、お前に嫌な役目をすべて任せてもいいという理由にはならないな。申し訳なかった』

『いえ、そんな……私……私こそ、すみません……』

呆れられていると思ったけど、そうじゃなかったんだ……

社長はクールに見えて、実はとても情に厚い。そんな人だ――

先輩はその後も変わらずに、厳しくも優しい指導を続けてくれた。後日、社長に告白しているところをまた偶然トイレの壁越しに聞いてしまった。社長の答えはNO――でも気まぐらな辞めてしまうことなく、このビルへ事務所が移転する前に、別の男性と結婚して寿退社していった。結婚式での先輩は、とても幸せそうだった。

懐かしいなあ……

「杉村先輩、お昼外ですかあ? あたしこれから地下の定食屋さんに行くんですけど、よかつたら一緒に行きませんかあ?」

彼女の名前はユキちゃん、一つ年下で私の後輩だ。緩く巻いた髪が愛らしくて、春らしい花柄のワンピースがとてもよく似合う。

可愛いなあ……このワンピース、確かこの前、雑誌で載ってた気がする! いいなあ、私もこういう服、着てみたいなあ……

「杉村先輩?」

「あ、ごめん。ユキちゃんが可愛いから見惚れた。うん、行きたい! 行こっ!」

彼女はとても人懐っこくて、こうしてよく私をお昼に誘ってくれる。まるで妹ができたみたいで、彼女と話している時の私はいつも頬の筋肉が緩みっぱなし。

私は財布だけを取り、ユキちゃんと一緒にエレベーターホールへ向かった。



ビルの地下一階にある定食屋さんは、リーズナブルで量も多くて美味しいので、このビルで働く人だけではなくて、よそのサラリーマンやOLからも人気がある。

満席で入れないかな? と思ったけれど、運よく五分並んだだけで入ることができた。
「あたし、また見ちゃったんですよぉー! 社長が告^こられてるのっ!」

ユキちゃんはサバの味噌煮を味わいながら、ニヤリと笑う。

「え、また? 今年に入ってから、えーっと……」

「五回目ですよっ! 今度は三階の歯科衛生士でした!」

確か三階の歯医者さんといえば、受付から歯科衛生士まで美人揃^{ぎら}いで有名だったはずだ。

さすが社長……!

正直な話、恋愛から距離を置いてる私ですら、もし社長が彼氏なら、幸せになれるだろうなあ、なんてことを考えてしまうくらい魅力的な男性なのだ。目撃された告白情報は今年だけで五回も! ……目撃されていいだけで、きつともっとあるに違いない。

「んで他のみなさんと同じく振られて、その人も『誰か付き合ってる人いるんですか?』って聞いて。それで、社長は『答える義務はない』ってやっぱり答えてましたあつ! なんか頑^{がん}なにいつもそう答えるから、あたし怪^{あや}しく思えてきちゃってえー」

「怪しく思えてきたって?」

「あたしも『なるほど!』って思ったんですけどお、あたしの彼氏が言うには、社長はゲイなんじゃないかって」

口に含んだわかめと豆腐のお味噌汁が、危うく気管へ入っていくところだった。

「ぶっ……ケホケホッ……! そ、それはないでしょっ!」

「だって今まで社長に告った女の人、可愛い系から綺麗系まで色々いたじゃないですか? でも社長は全然なびかなかったしい、ブス専なのかなあ? って思ったんですけど、この前告った人と、去年告ってきた何人かは不細工だったじゃないですかあ? だからその線はないなあって思ってた」

「ぶ、不細工って……」

「だってすごい不細工だったんですもん! あたし、元々人を見る目は厳しいんですよけど、ここに入社してからは毎日先輩を見てるから、さらに目が肥^こえたんですよえ」

ユキちゃんは、大丈夫ですか? と、各テーブルに備え付けてある水差しから、空っぽになった私のグラスに水を注いでくれる。

グラスの水を半分ほど飲み干すと、喉^{のど}が大分楽になった。

「ブス専ではないんじゃない? 私は付き合ってる人がいるか、結婚してるから断ってるんだと思うけど……」

「ええー? でも、指輪してないじゃないですかあー」

「今はしてない人も多いうて聞くんよ? 私は結婚してるに一票! 社長のあの落ち着き

は、一家の大黒柱っていう安定感からくるものなんじゃないかなあって思うんだけど」「でも結婚してるなら、『結婚してるから付き合えない』って断ればいいじゃないですかあ。言わないってことは結婚してないってことで、付き合ってる人がいるって線が濃厚ですよね?」

「うん?」

そこからどうしてゲイ説に……!?

「つまりは人に言いにくいような相手と付き合ってるってことですよね? 彼氏に言われてなるほどおっと思って思っただんですっ! ってことで、あたしはゲイ説を推します!」

そ、そうきたか……!

社長がゲイ……でも、社長なら綺麗な女の人を連れていても、綺麗な男の人を連れていても、どちらでも絵になるなあ……なんて思ってしまう。

「あ、杉村先輩、この話、ここまででストップしましょう」

「え?」

ユキちゃんは「お疲れ様でえす」と言っ、ニッコリ笑う。

「あら、お疲れ様」

声に反応して振り向くと、財布だけを持った目黒さんがうしろの席に座るところだった。

彼女は目黒由美子さん、黒髪のロングヘアが特徴のクールビューティーだ。目黒さんは三か月前に別のデザイン会社から転職してきた二十九歳の女性で……

「目黒さん、お疲れ様です。これからお昼ですか?」

「ええ、やる気のないあなたと違って、私は今まで作業していたものだから」

元々あまり好かれてはいなかったのだけど、株式会社バルファムの仕事を受け持つようになってからさらに嫌われるようになったのだ。

「可愛いって得ね。色気で社長に取り入って、バルファムみたいに大きな仕事が取れるんだもの。普段は女性らしくないサバサバした態度だけど、男の前ではどう態度を変えているのかしら。興味深いわね」

「なっ……」

「すみません、他の席は空いていますか?」

「あ、こちらの席にどうぞー!」

先ほどよりも空いてきたので、一人用の席ならポツポツと空いていたらしい。目黒さんは私たちから離れた席に腰を下ろす。

色気で仕事取るわけないでしょお!?

頭の血管が切れそうになるのをなんとか堪え、怒鳴り出したくなるのを我慢するため豚の生姜焼きとご飯を頬張り、むしゃむしゃと咀嚼する。

「あんの、腹黒っ！ ホンット嫌なヤツですよねぇ！」

「ユキちゃん、『腹黒』じゃなくて、『目黒』さんだから」

「んなこたあ知ってますよお！ あだ名ですっ！ あだ名っ！ なーにがやる気のないあなたと違って……だっ！ 仕事中にネットショッピングしてるくせにっ！ どっちがやる気ないんだっのっ！」

そう、目黒さんは自分はやる気がある！ と主張するのに、行動が伴っていない人なのだ。

就業中にネットショッピングはもちろんのこと、SNSで呟いたり、ブログの更新までもしている始末……気付いた周りが注意しても、参考になりそうなデザインを調べているだけで、勝手に遊んでいるなんて思われるのは不快だと逆切れするらしい。

アピールが上手いから周りではやる気がある人だと思っている人もいるけれど、一部の人間は声が大きいただけと気付いている。私とユキちゃんも気付いている側の人間……

「あいつ、杉村先輩がどんだけ頑張ってるか知らないくせにっ！ あー腹立つっ！ あたし、腹立つとお腹空くんですよねぇ！ ご飯おかわりしちゃおっかなあ」

うう、ユキちゃん……

なんていい後輩を持ったんだらうと、涙が出そうになる。

腹黒さん……いや、目黒さんは前の会社で九年デザイナーとして経験を積んだベテランらしい。今まで言われてきた嫌味から察するに、自分よりも職歴が浅い私が大口の仕事を任せられ、私が今まで引き受けていた仕事の後任をさせられることに納得していないようだ。

そもそもパルファムの仕事は目黒さんが入社する前に話が来ていた。その時いた全社員でパルファムの新ブランドにふさわしいデザイン案を提出し、まずは社長とアートディレクターの横田さんの二人でそのデザイン案の中からいいものを三つまでを選び、最終的にはパルファムにどのデザインがいいか決めてもらった。

新人もベテランも関係ないコンペで選ばれたのだと説明しても、目黒さんは『どうせ色目を使って勝ち取った仕事でしょ？』と言って、なにかと突っかかってくる。

パルファムの話を聞いた四か月前の私は、新ブランドのデザイン！ 絶対楽しいし、選ばれたい！ と意気込んでいた。

コンペのために与えられた製作期間は二週間。長いようだけど通常業務の合間を縫って作業をしなければいけないので、そんなに時間はない。

そのために残業してもいいと言われていたけれど、私的には不可だ。うちの事務所が独自でやるコンペだから、クライアントからの報酬は出ない。つまり残業をして残業代を発生させてしまえば、うちの会社の負担になるだけ。社外秘の資料もあるので自宅で

の作業も不可。

わずかな時間で新ブランドにふさわしいデザインを考えなければ……

自宅には持ち帰れないと言っても脳内で考えることはできるので、帰宅してからは脳内でデザインを考えて、朝は始業時間よりも二時間早く出社し、必死にやりくりして作った作業時間で、考えてきたデザインをデータに起こしていく。

朝方までデザインを考え、数時間だけ寝てから出社する生活を二週間続けていたので体力の限界を迎えてフラフラだった。けれど、満足できるものを仕上げることができた。私のデザインが選ばれた時は本当に本当に嬉しくて、その場で泣いてしまいたいそうになった。でも、『こんなところで泣いちゃって、ぶりっ子してるんじゃないの?』と思われるのでは!? と仮面についてるセンサーが反応して警報音を鳴らしたので、悲しいことを思い出して必死に引っ込めた。

「杉村先輩、あんな腹黒口だけ女の言うこと、気にしちゃダメですよっ!」

「うん、大丈夫。ありがとう」

「ホントに気にしないで下さいねっ! あ、この後、あたしコンビニ二行くので、おやつ用になにかつまめるもの買ってきますよっ! なにがいいですか?」

「じゃあ、おつまみ昆布。あ、でも自分で払うから。若い子に払ってもらうわけにいかないし」

「若い子って、大して年、変わんないじゃないですか! っていうか、なんでそんなおっさんセレクトなんですかっ! お菓子じゃなくておつまみだし!」

本当は新製品のチョコとかクッキー! って言いたいところだけど、可愛いもの好きなぶりっ子……なんて思われたら困るしね。

「杉村先輩、ほんつとおくに、無理しないで下さいねっ!」

無理なんてしていない。本当に大丈夫だ。だって私は仮面をつけているから。目黒さんにくら悪意のある言葉を投げつけられても、仮面に傷が付くだけ。仮面を否定されても、それは本当の自分じゃないから平気だ。

だから私は仮面を被り続ける。

ずっと、ずっと……それが私の処世術^{しよせいじゆつ}なのだ。



「お先に失礼します」

今日は金曜日——定時に業務を終えた私は、タイムカードを押してエレベーターホールへ向かった。

珍しく定時に終わったなあ……

今日は早く帰ってゆつくり休もうかな。それともショッピングに行こうかな。会社に着ていく用の春服を見て、新しいルームウェアも見よう！

普段は『毛玉の付いた、首がダルンダルンに伸びたスウェットを着てるんだ！』なんて言ってるけど、家での私は可愛いルームウェアに包まれているのだ。だって家族以外誰も見ないしね！

どこから回ろうか……なんてことを考えていたら……

「あら、杉村さん」

うしろから声をかけられた。この声は……振り返ると、やっぱりその人がっこり笑って立っていた。

「あ、目黒さん、お疲れ様です」

うげえ……また、嫌味を言われるのかな？

でも、おかしい。いつもなら小馬鹿にするような笑みを浮かべているのに、今日は妙に穏やかだ。機嫌がいい……とか？

「お疲れ様、これから帰るの？」

ショッピング……なんて余計な情報を与えては、それをネタになにか嫌味を言われるかもしれない。だから「はい」と短く返事をしたら、「じゃあ問題なさそうね」と言われた。

問題なさそうって、なに……!?

「実はこれから友人の付き合いで合コンに行くことになってるの。でもメンバーが急に足りなくなっちゃったのよね。杉村さん、予定がないならお願いできるかしら？ 費用はもちろん、こちらで持つわ」

し、しまった……予定があるって言えばよかった……!

「す、すみません。私、合コンとかそういうのは……」

行ったことないよ！ 誘われることはあっても、全力で避けてきたんだから！ 合コンなんて第一印象がものをいう場だ。もし友達が狙ってる男性が私の容姿を気に入らなくても……ああ、怖い！ 想像するだけで恐ろしい！

「ああ、杉村さんみたいに可愛いと合コンなんかしなくてもより取り見取りですものね。モテない下々の者が行くような場には行きたくない、と。なるほど、そういうことなのね」

えええええええ!?!? そ、そうくる……!?!?

「いえ、そういうんじゃないで」

「それとも今、彼氏いるの？」

行きたくない……っ！ 彼氏がいることにしちゃおう。

「実は……」

「どんな人？ 私が連絡して許可をもらうから、連絡先教えていただける？」
 はあ!? なんてそうなるの!?

連絡先なんてあるはずがない。彼氏いない歴イコール年齢なんだから！ それに協力してくれる男友達なんて一人もないし……

「じゃあ、問題ないわね」

断る術^{すべ}を失った私はにつこり笑った天敵に引つ張られ、強引に合コンへ連れて行かれることとなった。



合コンは会社からほど近い居酒屋の個室で行われた。

女性メンバーは私、目黒さん、目黒さんの友人の酒井^{さかい}さん。そして男性メンバーは目黒さんと同世代の落ち着いたスーツの三人。公務員と食品メーカーの営業と不動産屋の事務をしているらしい。

「すっごい可愛いから、芸能人かと思っちゃったよ！ 本当に違うの？」

「違います。ハハ……お、お若いのお世辞^{せじ}がお上手ですね……」

「いやいや、キミの方が若いっ！ 面白いね」

見られてる、見られてる。

オヤジキャラな私の性格を知らない男性からは『もつと知りたい!』というようなギラギラした目で、そして目黒さんと酒井さんからは『視線で殺せるなら殺したい!』というような目で見られている。

目黒さんがなにを考えているのかわからない。目黒さんは、なぜ私をこの場に連れて来たのか……

よくわからないけれど、私が取る対応は決まっている。それは仮面を強調して、幻滅^{げんめつ}してもらうこと。

「女の子たち、飲み物なににする？ はい、ドリンクメニュー」

「ありがとうございます。優しいんですねっ」

目黒さんはいつもよりも高い声を出して、ニコツと笑う。酒井さんと目黒さんが二人で一つのメニューを持って眺^{なが}める。私の席からは見えないけれど、頼むものはいつも決まっているので問題ない。

「私はビールで」

「お、ビール呑めるんだ？ 甘いじゃなくて大丈夫？」

「はい、大丈夫です。むしろ甘いのは好きじゃないんで」

大丈夫と答えたけど、本当は好きじゃない。ビールなんて苦いとは思えない。甘い

のが苦手なんて嘘だ。むしろ大好き！でもお酒はとりあえずビールってことにしている。深読みしすぎかもしれないけれど、私が甘いジュースのようなお酒を頼むと、男受けを狙っているように思われる気がするからだ。

女性だけの場で呑む時も、男性がいる場でだけビールを呑むと、サバサバした自分を印象付けようとしてるんじゃない？ などと思われては困るので、どこでもビールしか呑まないよう徹底している。

本当はカラフルなカクテルや果物がのったパフェみたいなお酒に憧れてるんだけど……多分一生味わう機会はないだろう。

目黒さんと酒井さんが頼んだお酒は、まさに私が呑んでみたいものだった。

うう、羨ましい。一体どんな味がするんだろう。

「じゃ、酒もきたし、とりあえず乾杯しよっか」

乾杯を済ませた私は、声のトーンを落として会話が弾まないよう心掛ける。

女性らしさを出さないように、慎重に、慎重に……

それはさておき、こうして見ると社長のレベルがどれだけ高いかがよくわかる。

社長みたいな人が合コンにきたら、女性メンバー大歓喜！その後ドロッドロの戦争になるんだろうなあ……って、なんで私、社長のこと考えてるんだろ。

中座してトイレに着くと、ドツと疲れが出て大きなため息が漏れる。

ああ、もう戻りたくない……

このまま家に帰って休みたい。ゆっくり半身浴した後、可愛い下着を付けて、可愛いルームウェアを着て、可愛いものに囲まれながらゴロゴロしたい……

学生時代はお金もないので地味な下着を自宅と外で兼用していた。けれど、社会人になってお金に余裕ができてからは、自宅用の可愛いものと外出時用のシンプルなものを使い分けているのだ。

普段の抑圧が強すぎる反動か、私の部屋は可愛いものに埋め尽くされている。自室にいる時が一番幸せな時間だ。

……と、現実逃避しても仕方がないんだけども。

覚悟を決めて戻る途中で、みんなの会話が聞こえてくる。お酒が入っているせいか、声が大きくなっているようだ。

「由美子さんと莉々花さんは同じ会社なんだよね？」

「ええ、そうなの。私の後輩よ」

デザイナーとして勤めた年数は目黒さんのほうが長いかもしれないけど、今の会社に勤めてる年数は私のほうが長いわけで……うむむ、後輩っていうのはちょっと違うような……なんてどうでもいいことにこだわってしまうあたり、私は目黒さんのことが本当に苦手なのだ。

「莉々花ちゃんったら、いつも彼氏が欲しいってうるさくって困ってて……だから今日の合コンは莉々花ちゃんのために開いたのよ」

は!? なに言ってるの!? この人!

当然だけど、そんなこと一言も口にしていないし、仮にそう思ってたとしてもこの人にだけは言うはずがない。

というか『莉々花ちゃん』って、なに急に馴れ馴れしい呼び方になっちゃってるの!? 普段は苗字でしか呼んだことないくせにっ!

「えっ! そうなんだ? 莉々花ちゃんぐらい可愛かったら、合コンなんて開かなくても、より取り見取りじゃない?」

「それがそうでもないの。ほら、莉々花ちゃんって顔はいいけど、それだけとか……性格に問題ありなの。顔に似合わずガサツだし、会話も広げようと努力しないし、だから男の人が引いちゃうのよね」

「ああ、確かにあんまり会話が弾むタイプではなかったね」

ハイ、そうです。弾ませないようにしてたんです。

「恋愛だけじゃなくて仕事もそんな感じでね……。ここだけの話、社長と取り引き先に色目を使って、本来なら私が手掛けるはずの大きな案件をあの子が横取りしちゃったのよ」

はあああああああ!?

「マジで!? それは酷いわ」

いや、違うから! 酷いのは目黒さんのほうだから! この腹黒っ!

「でも、可愛いから周りにチャホヤされて育っただけで根はいい子なのよ?」

悪口ばかり言っている女だと思われないようにか、フォローも忘れない辺りがやはり腹黒い。

チャホヤなんてされてないしっ! この顔のせいで今までどんな人生送ってきたと思ってるの!?

怒りで血管がプチ切れそうになったので、何度か深呼吸を繰り返す。

ここで切れたって、私が悪者に見えるだけだ。

「でもあんなだけ可愛かったら、ちょっとぐらいワガママでも目え瞑れるわ」

「わかるわかる。彼氏欲しいなら、俺立候補しちゃおうかな」

「あ、俺も」

冗談じゃないし……っ! もう、やめてよね!

私は個室から少し離れ、わざと足音を立てながらまた個室へ近付く。

「あ、戻ってきたみたい。今の話は内緒で……ね?」

目黒さんに甘えたような声でお願いされた男性陣は、「もちろんわかってるよ」とデ

レッデレの声で返答した。

はいはいはい！ 聞こえてましたからっ！

「ただいま戻りました」

なにも聞いていない素振りです。席に戻ると、全員何事もなかったかのように「お帰り」と声をかけてくれる。

「随分遅かったのね？」

「はい、少し混んだので。今は空いてきたみたいですよ。呑むとトイレが近くなりますもんねっ！」

「やだ、莉々花ちゃんたら下品なんだからあ。みんなごめんなさいねえ」

なんてね！ 戻るタイミングを失ってただけですっ！

「そう、じゃあ私も行ってようかしら」

「あ、じゃあ私も」

目黒さんと酒井さんが揃って腰を上げ、席を後にする。男性三人の中に一人取り残される状況……かなり気まずい。

「莉々花ちゃん、次はなに呑む？」

「あ、えっと、次はソフトドリンクにしようかと……あれ？」

持っていたはずのハンカチがない。うっかりトイレに置き忘れたみたいだ。

「どうしたの？」

ハンカチ持ち歩いてるって知られたら、女の子っぽいって思われるかな？

「すみません。えーっと、呑みすぎてまた尿意がっ！ ちょーっともう一回トイレに行ってきますね」

「ああ、そうなんだ。早く戻ってきてね」

「は、はい……」

うう、早く帰りたい……そんなことを考えながらトイレのドアに手をかけると、
「ね、杉村はどうだった？ いつも私が愚痴ってる通り最悪でしょ？」

と、さっき男性達と話してた時とは比べ物にならないほど低い目黒さんの声が聞こえてきた。

二人でトイレに来たのは、悪口タイムのためだったようだ。

自分の間の悪さに、心底嫌気がさす。

しかもさっきまで『莉々花ちゃん』だったのに、友達の前では『さん』もなしの苗字呼び捨て……っ！

「ホント顔だけの女って感じだったー。男にコビコビだったしい……」

「でしよう？」

え、あれのどこが!? 下品とか言ってますでした!?

「まあ、今回の男は狙ってないから別にいいんだけど。今日集めてくれたメンツ、全員ヤリチンだし、あいつらのうちの誰かがあの女を落として付き合うまでもっていけば、あんたのこの社長も奴に幻滅するでしょ」

はあああああ!?

「そうね。そうすればバルファムの仕事からも外されるはずだわ。実力のないあの子がやった仕事を途中からやらされるなんてプライドが許さないし、そうなったら全部最初からやり直すわ。私の方がセンスもいいし、納期は少し押しちゃうかもしれないけど、まあ先方もデザインを見せれば納得してくれるでしょうしね」

この人、嫌がらせをしたくて言ってるのかと思っただけど、本気で私が色仕掛けして、バルファムの仕事をもらったと思ってるの……!?

頭に血が上って、思わずドアを開いてしまふ。

「あのっ……!」

突然勢いよく開いたドアから、悪口を言っていた相手が登場して、二人は驚いている。目黒さんは吊り目がちな目を大きく見開いた。

オヤジっぽくてサバサバした性格の仮面を被_{かぶ}っているのだから、キヤラ的には聞き流さないといけないところなのに……ああ、ダメだ。止まらない。

「わ、私……そんなことしてません! 何度も説明しているように、あの仕事はコンペ

で正当に決まったことで……」

止まらなかった割には、いざ面と向かうと、言葉が喉_{のど}に詰まって上手く話せなくなる。目黒さんは驚いているようだけど、本人に悪口を聞かれたことに対しては少しも怯_{ひる}まない。

「あら、なんのこと?」

「え……?」

し、しらばつくれる気……っ!

「それよりもどうしたの? またトイレ?」

「あ、いえ、忘れ物を……」

あ、いけない。動揺しちゃって、つい本当のこと言っちゃった!

「忘れ物? ああ、もしかしてこのハンカチ? ちゃんと持ち歩いてえらいのね。はい、どうぞ」

受け取ろうと手を伸ばすと、そのままヒラリと床に落とされた。

「ちよっ……なにを……」

「ああ、ごめんなさい。手渡すつもりが落としちゃったわ。うふ、酔っちゃったのかしら? 私、杉村さんと違ってお酒に弱いから」

彼女の目付きは酔っているとは思えないほどしっかりしているし、口調もハキハキし